

# 白蛇伝

佐藤 良士

今回は中国の代表的な民間説話「白蛇伝」です。昔話によくある異類婚姻譚のひとつですが、ここに登場する主人公は日本の鶴や狐と違って、幸せを求めて戦う典型的な戦闘美女。彼女は、人間の真心と永遠の愛を求めて、遠い昔の中国からやってきたのです。



或る春の日のことである。

中国の峨眉山は清風洞に、千年の間仙術の修行を積み妖精となった「白娘（ばいにゃん）」という名の白蛇が居た。白蛇は一度人間の世界を見てみたいと思い、乙女の姿に身を替えると、青蛇の妖精を供にして、空の上から地上を眺めた。

「人間の世界はどこもかしこも楽しそうだと、でもどこへ降りたらいいかしら」

白蛇の後ろから地上を覗いていた青蛇の「小青（しゃおちん）」が言った。

「あの水面に塔の影を映して、キラキラ光っている湖の街はどうでしょう」

白蛇と小青が見えたのは、西湖の湖水きらめく杭州の街、季節はちょうど春のお彼岸の頃、あちこちに朱色の建物が映え、湖の岸には柳の枝が風に揺れ、桃や李の花盛り。二人はゆらゆらと空を漂った後、西湖の畔の「断桥」という名の橋の袂に降り立った。

すると、そこへ一人の健やかな顔立ちの背の高い若者が通りかかった。名を許宣（しゅうせん）といった。白蛇は正直そうな許宣が一目で好きになり、許宣も美しい娘の白蛇に心引かれて、やがて二人は結婚して揚子江のほとりの鎮江の街で薬屋を始めた。白蛇は仙人だった時の知識で珍しい薬草や、貴重な宝玉から作った薬が評判を呼んで薬屋は大繁盛、やがて白蛇は子供を授かった。

こうして二人は誰にも邪魔されず、幸せに暮らしていた。

ところが良いことは長くは続かず、この鎮江の街外れの金山寺に住む法海和尚がこの薬屋の噂を聞いて、ある日街に出かけ、街の中の妖しい気配を感じ取った。

和尚も修行を積んで、妖怪の正体を見破る力を備えていたのである。

「妖怪はあの薬屋に潜んでいるようじゃ」

和尚はさっそく許宣の元に出かけて行き、

「許宣よ、迷いの道から目覚めよ。お前の妻は妖怪じゃ、美しい女に化けておるが、もう千年も生きておる。このままあの女と一緒に暮らしては、お前は女に食われてしまうぞ」

そう言われても許宣には信じられなかった。自分の女房が恐ろしい妖怪などは、とても思えなかったのである。

「お前に分からぬのも無理がない。だが端午の節句が来れば、お前にもきっとあの女の正体分かるぞ」

それから法海は、端午の節句に飲む薬の酒を、彼女に飲ませてみよ、きっと妖怪の正体を現すに違いない、と言って立ち去った。

許宣は迷った。和尚の話は信じられなかったが、それでも気になった。

端午の節句の日、薬の酒を用意して白蛇に勧めた。いつになく執拗に酒を勧める許宣に、白蛇は眉を潜めた。

「私がお酒を飲めないことは分かっている筈だし、おまけにお腹には二人の大事な子供がいるのに……」

だが断れば断るほど不安げに酒を飲ませようとする許宣に、とうとう一口だけ飲んでしまい、とたんに気分が悪くなって、隣の部屋に逃げこんでしまった。

「どうして人は迷うのでしょうか。どうして人は疑うのでしょうか。私はあなたを好きになって、一緒になっただけなのに、人間になって生きていくことは、こんなにも苦しいことなの」

苦しさに耐え切れず、いつか白蛇は元の蛇の姿に戻ってしまっていた。

そうとは知らず、白蛇の逃げ込んだ部屋を覗いて許宣は驚いた。そこには大きな白い蛇が居たからである。驚いた許宣は気を失ってしまった。

「ああ、悲しい。あなたに見せたくない姿をみられてしまった。私の姿を見た許宣は倒れてしまった。そうだわ、私はこうしてはいられない。私の大事な人を助けなければならない」

気を取り直した白蛇が、許宣を救うために遥か遠くの魔界の山に薬草を取りに行くが、そこでは蠍(さそり)や蛇の魔物が山を守っていた。

「お願いします。私の話を聞いて下さい。私も元はあなた達と同じように仙術修行をしてこの峨眉山を守ってきました。しかし私は人間の世界に出掛けて、そこで一人の人間と出逢い、今では二人でつつましく暮らしています。ところが、その人が病気で今にも死にそうです。だから、この峨眉山の薬草が欲しいのです」

でも、峨眉山の魔物たちは、人間を愛してしまった白蛇を許そうとはしない。

そこで白蛇は魔物たちと戦うが、悲しいことに多勢に無勢、おまけに身重の白蛇は、なかなか薬草を手に入れることが出来ない。

白蛇は苦しい息の底から峨眉山の主の竜王に訴えた。

「竜王様、お願いしますから私に薬草を一掴み分けていただけませんか。それさえ手に入ったら、私は死んでもかまいません」

その言葉を聞いた竜王は白蛇をけなげに思い、妖怪たちを追い払って薬草を分けてくれた。こうして薬草のお陰で蘇った許宣と白蛇は、また元のように二人で仲良く暮らし始めた。

ある日、病気回復のお礼にと許宣が金山寺に出掛けると、そこには法海和尚が待っていて言った。

「ちょうどよかった。妖怪から身を守るために、お前は寺に籠もるのじゃ」

幾日かして、帰らぬ許宣を心配してお寺にやってきた白蛇に、和尚が言った、「白蛇よ、お前は所詮妖怪じゃ、人間なぞにはなれぬ。人の世で悪事を働いてはならぬ。許宣のことはあきらめて、峨眉山に帰るのじゃ」

白蛇が美しい眉を上げ、寺の山門に立つ法界和尚を見上げて言った。

「私は薬屋を開いて病で苦しむ人を助けました。これを悪事と言うのでしょうか。私は結婚して子供も授かりました。私は人を愛せてはいけないのでしょうか。和尚様、妖怪払いの杖だとて、二人の仲を裂くほうが、よほど悪いことでしょう」

人間の母になろうとしている白蛇の激しい気迫に敵わぬとみた和尚は、突如空に舞い上がり、空から風神、雷神を呼び寄せて白蛇に襲い掛かった。白蛇は揚子江に高波を起こして反撃しようとするが、身重の白蛇には戦うだけの力がなく、小青に助けられて、かつて許宣と出会った西湖のほとりの断桥まで逃げてきた。

するとそこで思いかげず、許宣の姿を発見した。許宣は和尚が白蛇と戦っている際に金山寺を抜け出して、白蛇を追ってきたのである。

傷ついた白蛇に許宣は、和尚の言ったことが本当のことかどうか尋ねた。

「そうです、あなたが聞いたことは全部本当のこと。あなたは驚いたかもしれないけど、私は峨眉山で修行した蛇なのです。人の世界を一目みたいと、この西湖にやってきて、あなたに出会って私は貴方の優しい心に引かれ、やがて結ばれて楽しく暮らしました。それなのにあなたは法海和尚の言葉で私を疑って毒のお酒を勧めたりして。私の本当の姿を見てあなたが倒れた時、必死の思いで薬草を手に入れてきたのに、病気が治ればまた心変わり、金山寺に入ったきり帰ってこない。私は今日は帰るか毎日朝まで待ちました。私が和尚と戦う決心をしたのもあなたとの生活を取り戻したいと思えばこそ、あなたの子供を産みたいと思えばこそ。西湖の景色はあなたと出会ったあの日のままなのに、あなたは替わってしまった。あなたはまだ和尚の言葉に唆されて、私の真心を疑っている。あなたはどちらに真があるのか、自分の心にお尋ねなさい」

白蛇の言葉を聞いた許宣は、これまでの迷いを断ち切った。

二人は法海和尚に見つからないように杭州から離れた山の中に小さな家を見つけると、そこで暮らし始めた。それから暫くして許宣と白蛇の子供が無事に産まれた。その日許宣は、芳しい野の花を摘んできて産後の妻の髪を飾った。

突然、法海和尚が沢山の神将を引き連れて許宣の家に現れたのは、その日の夜のことである。白蛇には法海と闘う力はなく、騒ぎを聞きつけて空から駆けつけた小青も、神将たちが持つ妖怪封じの鉢の力でどうすることも出来なかった。許宣の必死の願いも法海は聞き入れず、白蛇は神将たちに連れ去られてしまった。

やがて、法海によって白蛇が世にも恐ろしい妖怪として、西湖のほとりの雷峰塔の下に封印されたことが伝えられた時、許宣ははじめて悟った。

法海こそが妖怪で、白蛇は人間の心を持った本当の妻であったことを。

**異説白蛇伝** 話はこれでおしまいです。でもこれじゃあまりにも悲しすぎるし、尻切れトンボのよう、そこで、いろいろな後日談が考えられる。

例えば、小青が峨眉山の竜王にかけあって法海が施した雷峰塔の封印を解いてもらい白蛇を救けたとか、子供が成人して偉い人になり雷峰塔の母親に会いに行ったとか。まあ、しかしどれも悲しくて現代人には受け入れにくい、やっぱり大人も子供も楽しめるドラマにするにはハッピーエンドにしたらということで、昔懐かしい東映のアニメドラマ「白蛇伝」はそうなんです。

覚えていらっしゃる方も多いでしょう。劇場用の初の国産アニメ映画、「白蛇伝」、昭和33年の封切りで、声優は森繁久弥と宮城まり子の名コンビ、ディズニーアニメしかなかった時代に造られたアニメ映画の傑作です。

で、この白蛇伝では、白蛇が法海和尚と戦う物語の展開はほぼ同じだが、最後に許宣の命が危うくなって、白蛇は許宣の命を助けてもらう代償として仙人の力を失くしてしまう。人間になって戦う力を失くしてしまった白蛇は、そのかわりに人間としての小さな幸せを得ることが出来る。かつての妖精仲間の小青や、最後は味方になった法海和尚に見送られ、許宣と一緒に幸せに包まれて小さな船で去って行くというのが、千里丘陵に2DKの公団住宅が並び始め、団塊世代が青春時代に向かう時代の日本で造られた「白蛇伝」だったので。

ところで、「白蛇伝」は中国の代表的な民間説話の一つで、元の話は白蛇の化身である女性が人間の男性と巡り合って夫婦となるが、正体が知られ退治されるという妖怪伝説。白蛇が人間に変身した時の名前も「白素貞」といって、これは中国の代表的な悪女とされていたんです。

その妖怪退治の話が、白蛇と男性の恋愛物語や、白蛇が可憐な娘の姿に書き直されて、今の物語の原型が出来たのはおそらく明代のころでしょう。今回僕が書いたのは、現代の京劇「白蛇伝」のストーリーが元になっています。

物語は時代によって所によって、あるいはその物語を書くときの作者によって、一つの物語が悲しい物語にも楽しい物語にも変身して行って、幾つもの「白蛇伝」が出来たのですが、この京劇版の「白蛇伝」は古い時代の物語りをそのまま伝えているといわれています。

それはこの物語が人間の願う幸せのはかなさや、抗うことの出来ない運命の悲しさを伝えて、いつの時代の人にも共感されたからではないでしょうか。

